

特集 今後の国際文化交流のあり方 日本文化発信の重要性と課題

- 巻頭言 8 文化力による平和の実現 ●河合隼雄
- 解説1 10 国際文化交流に関する取組 ●文化庁長官官房国際課国際文化交流室
- 座談会 12 国際文化交流と日本文化の発信
(出席者) 山内昌之／平田オリザ／松田惺山／里中満智子／(司会) 秋葉正嗣
- 論文 24 国際文化交流の新段階 ●青木 保
- 特別寄稿1 28 文化をとらえて国際理解を ●阿刀田高
- 特別寄稿2 30 ローマ国立大学講談研究会 ●神田山陽
- 特別寄稿3 32 日本の今日の先駆的、実験的音楽の可能性 ●伊東篤宏
- 特別寄稿4 34 『村の写真集』における国際映画祭 ●三原光尋
- 特別寄稿5 36 無形文化遺産条約の発効 ●河野俊行
- 解説2 38 日本の文化遺産国際協力 ●文化庁文化財部伝統文化課文化財国際協力室
- 事業紹介1 40 日韓交流音楽祭に参加して ●青森県立田子高等学校
- 事業紹介2 41 沖縄と韓国済州島の出会い ●沖縄県南風原町立南風原文化センター
- 事業紹介3 43 Leave a Legacy! 日豪交流年にあたって ●オーストラリア大使館広報文化部

特別記事 46 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(答申) ●初等中等教育局教職員課

52 宇宙開発利用の推進 最先端科学技術を教育・学術・産業に活かす
●研究開発局宇宙開発利用課

- 6 インフォメーション
45 インフォメーション
62 報告
●OECD教育大臣会合の開催
- 63 インフォメーション
64 変わる大学教育改革
●千葉商科大学／北九州市立大学
- 68 これからの社会教育へ
●児童サービスが充実している 図書館
- 70 日本人学校における国際交流活動
●ニューデリー日本人学校(インド)
- 72 そろそろ心おろす心を持って
●国立中央青少年交流の家
- 74 科学技術と社会 最前線
●国際科学技術コンテスト支援
- 76 自分発見 地域貢献! ボランティア
●奏でよう 喜びにつながる 高校生ボランティア活動
- 78 海外最新情報
82 都道府県発
●教育科学技術 学術文化・スポーツ・ニュース
●青森市／三重県／岐阜県／福岡県
- 84 編集後記

カラー

1 あたらしい学舎(まなびや)はじまる
●愛知県東浦町立石浜西小学校

4 トビックス 文部科学省の窓

表2 特別記事関連企画
●宇宙の扉を拓く
表3 さかなの子育て
●ペンギンにペンギンを 刷り込む



●出席者(発言順・敬称略)

山内昌之
やまうちまさゆき
東京大学大学院教授

平田オリザ
ひらたおれざ
劇作家・演出家

松田惺山
まつだせいざん
鬼太鼓座代表

里中満智子
さとなかまちこ
漫画家

●司会

秋葉正嗣
あきはまこと
文化庁長官官房国際課長

座談会

国際文化交流と 日本文化の発信

●秋葉 本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

昨今の国際化、情報化の進展に伴い、国際的な文化芸術の交流を通じて、世界の人々の相互理解を増進するとともに、世界の平和と自由な世界の実現に貢献することが我が国に求められています。また、海外において日本文化に対するニーズが高まっているという状況があります。

このような中で、今後の文化芸術分野での国際交流、あるいは日本文化を積極的に発信していくことに関してどのように取り組んでいくべきか、現状と課題、今後の推進方策、方向性などについて、海外での活動経験が豊富な皆様にお集まりいただき、語り合っていただきたいと思っています。

これまでの 国際文化交流への取組

●秋葉 まず、皆様がこれまで国際文化交流の面を取り組まれてきたことについてお聞きしたいと思っています。

●山内 本日のメンバーの中で、私は芸術性から比較の違いとところにいる人間ですが(笑)、私が文化交流あるいは国際交流、ひいては日本文化の発信を考える場合、問題が二つあります。

一つは、私は大学で中東やイスラム世界を

中心にした国際関係の歴史や地域研究を専門にしております。その研究や教育という観点から、いろいろな国の専門家、現地の中東の研究者やジャーナリストのみならず、ロシア、フランス、イギリス、アメリカ等の研究者たちとの交流もあります。狭い意味での学术交流も常に国際交流という側面があるのです。

もう一つは職業の違いにもかかわらず、日本の市民として、自分の職業や専門を基礎としながらも、それを超えた形でお互いの文化を理解し合い、自分の専門性を生かしながら、外国人に語っていく広い意味での文化交流もあると思います。

私はこの二つの交流事業に少しばかり参加しているわけですが、この二つをつなぐものとして私がいつも意識しているのは、文化の伝播ということです。それは文化外交という考え方につながるとしています。外交領域と文化伝播という二つを合わせたような考え方が、私が考える「文化外交」ということになろうかと思っています。

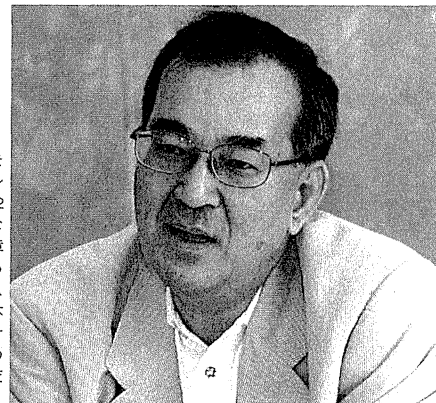
私は職業柄、文化交流や国際交流という問題を政治外交の領域と結びつけて話さざるを得ない面があります。その営みとして、特に中東を中心にしてこれまでいくつかの活動をしてまいりました。中東への文化ミッションに際して、この三年間、三回にわたって団長を務めました。また、今年の夏、第四回目を迎えた

さらに、日韓の歴史共同研究合同推進計画支援委員会という、最終的にはお互いの国の歴史を理解し合おうという会議にも参加しております。

しかし、両国が同じ教科書を書けるのかという点、それはなかなか難しいのも事実です。ともかく問題点としてこれこれのことがあるということ整理しあって、歴史家や社会科学者として、問題がとんでもない方向へ逸れて、両国の国民が感情的にならないような努力をそれぞれの社会においてしようではないかという趣旨の集まりにしたかったのです。

また、昨年、文化外交の推進に関する総理懇談会に参加いたしまして、文化外交とは何かという報告書をつくり、さまざまな交流を発信する努力もしたつもりです。

●平田 先日、フランスのアヴィニョンから戻りました。アヴィニョンでは「アヴィニョン演劇祭」という世界最大の演劇祭があるのですが、そこで私の作品を上演したため、それを観に行きました。作品自体は『ル・モンド』の



●山内昌之氏

国際関係史とイスラーム地域研究を専攻。発展途上国研究奨励賞、サントリイ学芸賞、毎日出版文化賞(2回)、吉野作造賞、司馬遼太郎賞などを受賞。平成18年4月紫綬褒章を受章。小泉首相の外交を補佐する「対外関係タスクフォース」の委員、政府中東文化ミッション団長、日本アラブ対話フォーラム、日本カナダ・フォーラムの委員などを務める。平成17年7月には、文化外交の推進に関する懇談会に参加。

第一面に写真入りで紹介されるほど大きな成果を収めました。

今シーズンはフランスの劇場で四本、私の作品を上演しますが、それぞれ形態が違います。一つはこのアヴィニオン演劇祭で、フランス人の演出家が日本人の俳優を使って字幕入りで上演しました。

一〇月には私たちの劇団が私の演出で作品を持っていくと同時に、シャイヨー国立劇場というフランスで二番目に重要な劇場で、フランス人の演出家がフランス人の俳優を使って私の作品をフランス語で上演します。

もう一つ、フランスの地方の国立演劇センターがお金を出し合い、私の新作をフランス人俳優五人と、日本人俳優三人で演じる公演を来年一月末からフランス各地で行います。この公演は、日本語も少し入ってきますが、ほぼフランス語です。フランス人の演出家が演出をして、私がその演出のお手伝いをするというものです。そういった共同作業が、今、非常に増えてきております。

私の場合は、全世界というわけではなく、なぜかフランスと韓国が多いのですが、フランスでは翻訳者に恵まれたおかげで、たくさん翻訳もしていただき、脚本が出版され、大きな成果を収めています。

韓国については、八四年から八五年に一年間留学をしていたため、多少韓国語が話せる

せいか、一五年以上韓国の演劇界とのつき合いをさせていただいております。その集大成として、四年前に『その河をこえて五月』という作品を日韓の作家・演出家が合同で作りました。日本人俳優六人と韓国人俳優五人が出演し、言葉も両方の言葉を使って、日本で公演したときには韓国語の部分に日本語の字幕を出して、韓国で公演したときにはその逆の方法で公演し、はじめて日本でも韓国でも大きな演劇賞を受賞しました。

また、ワークショップもたくさんやっています。例えば三年前には東南アジア各国でワークショップを一週間ずつ行いました。特にアジア各国では、演劇教育がこれから重要になってくるので、技術面、劇場運営も含めて、今、各国と連携をしているところです。

文化庁文化交流使ですが、これはカナダのビクトリアという非常に小さな町の大学を中心に北米各地を回っていたのですが、もちろん一つは演劇を教えるという仕事を、もう一つは日本語教育の中に演劇をどう生かしてもらうかという仕事をしております。

その他、日仏と日中の合同公演の準備を今しているところです。

●松田 鬼太鼓座は生まれてから三十七年、活動を実質的に開始して約三三年経ちます。基本的に私たちの集団は、ひとことと言うと変なのです。「変」というのは節々でとにかく変

えていくのです。

ただ、一つだけ軸がぶれない点があり、それは我々は日本人、日本文化を紹介するという基本姿勢は、三十七年間変わらなない。創始者の田耕^{タノウ}の言葉で言いますと「日本人の民族の血をおれらは伝えるんだ」ということを継続してきました。

鬼太鼓座が当初生まれたとき、ボストンマラソンを走って、ゴール地点で太鼓をたたくというパフォーマンスをやったら、これが結果的に大当たりしまして、鬼太鼓座が有名になり、太鼓のステージ芸能というのが生まれ、太鼓ブームが生まれ、日本中に五〇〇〇も六〇〇〇も太鼓チームができました。

当然、有名な方との交流や、大きな劇場での公演も生まれました。太鼓というものを世に知らしめるためには効果的だったのですが、それが結局、公演をするという仕事になってしまったのです。

そうすると、自分たちはこんなに認められたのだということで、いい気になってしまった。そういうことをいったん全部壊してしまふ。それでまた新しく始めるということを常に繰り返しているのが鬼太鼓座です。

その中でぶれなかったのは、日本民族の血をどう伝えていくかということであり、それを実践するために鬼太鼓座は世界各国へ旅を続けているわけです。

本年六月にはモロッコに行つてまいりました。フェズというところでフェスティバルがあり、その参加の誘いを受けたのですが、私たちが行く以上、公演だけではもったいない。公演では限られた人との交流は生まれますが、実際に現地の人との交流はなかなか難しい。

そこで、サハラ砂漠を走り、現地の人と交流をし、鬼太鼓座の旅として成立させたいということを提案したところ、文化庁の支援を得てこれを実現することができ、サハラ砂漠のベルベル人との交流が生まれるところまで発展させることができました。

昨年末からは日韓の間で共同創作に取り組んでいます。鬼太鼓座の活動は、日本、韓国、韓国との関係を、古くからずっと見つけていた関係で、我々のステージの中には、多くの中国、韓国の演奏家の方に協力していただいてつくり上げてきた歴史があります。

その中で常に思っていたのは、日本、中国、韓国が、おらが国の音楽ではなく、オーケストラ・アジアというものをつくって、世界へ発信できないかと相談していたのです。

そこで、韓国のアーティストと、東アジア、日本、中国、韓国を中心にした一つの作品をつくり上げて、それを発表していきたいしょう、と話をしてきました。昨年度末は済州島で行いましたが、私たちは今、富士山の懷で生活をしているので、今年はずいぶん富士に來てほしい

という話をして、昨年度を終えました。

●里中 私は仕事柄、どこかへ出て行つてしなければいけない仕事ではないので、本来でしたら、ただただ創作していればよい仕事なのですが、どうしても国際交流といった活動に一所懸命になったかといいますと、単純に自分がそういうことに意義を感じるからなのです。

私は大阪の生まれ育ちで、在日韓国人のクラスメートもたくさんいました。子どものときはあんなに屈託なく話せたのに、少し知恵がついてきますと、お互いに遠慮し合い、やがて理解してもらえないのではないかと、永久にわだかまりが解けないのではないかと疲れてきました。これはどうしようもないのかと思っていたところに、韓国で日本の漫画が、海賊版ではありながらたいへん評判になっているという事実が、私自身が感動しました。

そして今から一五年ぐらい前に、知り合っていた韓国の漫画家たちから自国での海賊版の取り締まりに関して、日本側からも意見を言っしてほしいと要請があったため、韓国にお願いに行きました。それが交流の最初になるわけです。

実際、私どもは描いていけばいいだけの仕事ですが、海外で読んでもらえる、それを通じて日本人の考え方を理解していただけたということがすごくうれしく思いました。韓国人の漫画家の中には学校教育その他で、日本に對



●平田オリザ氏

大学在学中の1983年に劇団「青年団」を結成。現在は東京・駒場のアゴラ劇場を本拠として活動。1989年、日韓併合前夜の漢城（当時、現ソウル）を舞台にした『ソウル市民』を初演。『東京ノート』（95年）で第39回岸田國士戯曲賞、松田正隆作『月の岬』（97年）演出で第5回読売演劇大賞最優秀作品賞・優秀演出家賞を受賞。2006年1月から3月まで文化庁「文化交流使」として、カナダ、米国にて活動。

してよいイメージは持っていなかった、日本人とつき合うのも怖かったという人がいました。ところが、自分が小さいころ感動して、漫画家になりたいと思ったきっかけとなった作品、これが実は日本の作品だったのだということを知ったときは、日本人の描いたものに感動するということは、自分も日本人と同じ恐ろしい、鬼のような感性の血が流れているのかと思っていへんショックだったと言われたのです。

しかし、続けて次のように言われました。「自分は日本人像を一つしかつくり上げていなかった。だけど、実際日本人の描いた作品を読んで、それに感動して、こういうものを描きたいと思った。こういう温かい、感動させる作品を描く人が日本人にいるとすると、日本人というのは自分が学校で習った日本人ばかりじゃないのではないか。だから、自分は一度心を真っ白にして、日本あるいは日本人を見てみようと思った」その時へああ、漫画家になってよかったな。自分がこの道に進んだごほろびのような気がしました。

それをきっかけとして、韓国人の漫画家たちと交流を深めるうちに、日本と韓国、中国、香港、台湾の漫画家を誘って、アジア地域の中で漫画文化を支え合おうという「アジア漫画サミット」という企画を立ち上げ、五地域持ち回りで合同の展示会、フォーラム、懇親

会、記念出版、そのほかいろいろかかわってました。

日本文化に対する理解

●秋葉 次に、これまでの経験から、外国において我が国の文化についての程度理解が進んでいるのか、どのような現状にあるのかについてお話しただけだと思います。

●松田 私たちは基本的に太鼓をたたき、音楽をする以前に、日本人としてどう生きるかを考えています。そして、なぜかわからないけれども、昔から走っているのです。毎朝六時から走って、一日に二〇〜三〇キロ走っている生活を常に続けています。いかにして日本人を貫くかということに焦点を絞って、試行錯誤しつつ、走ることは続けてきました。実質的に走るという行為が、まず顔つき、体形に影響してきます。私たちの衣装は、基本的に裸が多いのですが、ちよつとでも怠けると、怠けた姿が出てしまう。そういう意味で、私たちは常に走って、ステージに出たときに、日本人としての表現をステージでどう確立するかを考えているのです。

また、国際交流という面ではアメリカ大陸を一周して、大体二四〇都市で三五五公演をしましたが、その中で生まれた交流は、劇場で公演するときには決して生まれない、本当

の意味での対話が成立するのです。そこでは、はじめて日本人と接する方たちも非常にたくさんいらつしやいますので、日本人というのはこういう人たちなのだということを理解していただくようにしています。

アメリカの中でさえも我々が初めて行く場所がたくさんあり、私たちも新しく相手を知るといふ機会が生まれるわけです。そうすると、漠然とアメリカという国はこうというだけではなくて、本当の意味で日本を紹介し、アメリカを知る、外国を知るといふ経験ができます。

また、現在中断していますが中国大陸は西安から北京を抜けて、上海で中国大陸一周を完結する予定です。日中友好マラソンということで、本来外国人が入れない山奥の村にも行くことがあります。そのときに、大雨が降ってずぶ濡れになってしまい、茶店のようなところに我々がブルブル震えて入っていくと、生姜湯をだしてくれました。そのお礼として尺八を少し演奏すると、山の中にもかかわらず人だかりができてきたのです。その時に、テレサ・テンさんの曲を演奏したら、とてもよく聴いてくださいました。そうして現地の方と一体となった関係が生まれましたが、これこそが我々の活動の原点だということを感じることができました。

●里中 ようやく欧米でも日本の漫画はカッ

コいと言われるようになりましたが、実はアメリカが日本の漫画を認めるのがいちばん遅かったのです。

漫画もアニメーションも昔からアメリカや旧ソビエト連邦においてかなり上質なものを作られていました。また、漫画は昔から世界各国に当たり前のよう存在していました。そして、漫画というのは子どもが見るものであり、正義と悪がはっきり分かれていて、読後感がだれにも納得でき、ある程度教育的な要素も入っている、という常識で作品がつくられてきました。

だけと日本人は、昭和三〇年ごろから漫画という表現を利用して、ありとあらゆることを語ろうとし始めたようです。手塚治虫先生を筆頭として、これまでにないテーマとキャラクターが生まれてきました。その漫画は、必ずしもハッピーエンドではありませんし、主人公がたいへん醜かったり、理解されずに倒れていたり、そういう暗い話も子ども向けのものとして描かれてきました。でも、それが感動を生んで、ついに瞬間芸から哲学まで漫画で語るようになったのです。

しかし、昭和四〇年代後半にアメリカに日本の漫画を売り込んだときに、主人公がカッコいいもの、ヒーローはいつも正義の味方で必ず勝つというものの以外はコミックではないと否定されたのです。

その後、日本の漫画界は国内だけを相手に発展したのですが、そのうち海賊版という形ではあるものの、アジア近隣諸国でよく読まれているそうだという話が伝わってきました。アメリカ人に否定された自分たちの作品をアジアの子どもたちが読んで、しかも日本の子どもと同じところで感動することがたいへんうれしかったのです。

今では、野球を目指す子がみんなアメリカのメジャーリーグで活躍したいと思うように、世界中から若者が、日本で漫画家になりたいと思われています。

●平田 ここ数年、韓国の演劇賞で日本の作家の作品がノミネートされない年はないというぐらいに、韓国では日本人の作家の作品の上演は普通になってきています。今世紀に入ってから、日本の劇作家の作品が海外で上演されるのが少しずつ増えてきたと思っっています。

さらに最近、外国との共同作業が進んでいますが、一つには、字幕技術の発達があります。今まで演劇は言葉の壁があることから、ダンスや、前衛的な作品と違い、台詞劇は外国に輸出することが難しかったのです。今はコンピュータや、プロジェクトが相当発達したため、映画並みに字幕が出せるようになり、言葉の壁が随分低くなったと思います。

もう一つは、翻訳家に恵まれれば、ただ外

国際文化交流と日本文化の発信

国に行って上演するというだけではなく、その後海外の演出家、俳優で上演してもらうことが可能です。今年、ソウルでは私の作品を三本上演しています。

●山内 平田さんのお話をうかがっていて、言葉の問題、台詞の問題が演劇の場合には大きいと言われたのですが、私たちがよりは恵まれている（笑）。我々のような基礎的な学術研究に比べると、役者は身ぶりや手ぶりや表情を使用して、万国共通の発信はできるからです。そういう点でいうと、音楽や漫画というのは、了解度や理解度が、ある意味では瞬時にして可能というところがある。それは文化交流のあり方として、私たちからすればうらやましいところですね。絵というのは言葉ではなくて、描写やデッサンで感動を伝えていく。感動を伝えると表現したのは、まさに言葉というのとはときとして冗長であって、あまり意味をなさなというこの反語的な表現なのです。感動は、音楽でも、演劇でも、漫画やアニメーションにおいても、瞬時に現れます。

最近では『火垂るの墓』というアニメを観て感動した人は多いと思います。まさに言葉が必要としません。戦争を背景にして、兄妹の痛ましい変容、幸せな家族の崩壊をみていくときに言葉は必要ないのです。日本人ならすぐに意味が分かります。絵の動きや瞬間的な仕事で、我々に感動を迫ってやまないの

ですね。

●里中 日本において漫画家に求められる才能は、脚本家としての才能です。絵は下手でも、その方が訴えたい絵であれば、日本の読者は受け入れ、そこから魅力的なキャラクターが生まれてきました。

ところが、日本以外の国で、漫画家という仕事は、画家の一部なのです。だから、まず漫画家を育てようとする、ほかの国ではほとんど絵から教える始めるわけです。日本においては、自分自身のものの考え方、表現の仕方がなくて、いくら絵がうまくてもどうしようもないことは、日本のこの豊かな漫画文化の現実の中で、読者もわかっておりまして、海外に行くと若者たちに教える場合、私は必ず脚本をしっかりと教えてほしい、構成を教えてほしいと言っています。

キャラクターデザインも決してものまねじゃなく、自分たちの民族性、民族に根ざしたもののから生み出してほしいと思っていますが、まだなかなかそれが理解されない地域も多いようです。

●山内 文化交流において、我々のような研究者にとつての互いの感動とは一体何なのだろうかと考えると、それはやはり経験の問題になります。

今、アラブでも、トルコでも、イランでも、自らの国づくりにおいて非常に苦しいところ

です。そこで、日本がある意味では高度成長に向かっている。これは奇跡といってもよいでしょう。

しかし、高度成長はネガティブなファクターとして環境問題と公害を生み出しました。光だけではいいし、闇もある。しかし、闇だけではなくて、光もある。こういうある種の弁証法的な構造と経験を理解した国は、現代史において少なく、日本がその一つであるのでしよう。

こうした点を外国の方に語って行くときに感動につながるものだと思います。いわゆる歴史認識とは、どの国にとつても、光と闇の双方をもつバランスのとれたものでなくてはなりません。問題を克服しようとする努力に感動も生まれる根拠があるのでしょうか。

●平田 里中先生のお話に大変感銘を受けたのですが、私も韓国や東南アジアでワークショップをするときに、別に私の方法論をそのままやってもらいたいのではない、ヨーロッパで生まれた現代演劇を受容して、どうやってオリジナルの作劇方法を生み出したかというその態度みたいなものを学んでもらいたいのだと常に言うのです。

いずれ東南アジアの国々も、自分たちのオリジナルの現代演劇をつくっていかなくてはならないわけです。それはそれぞれの固有の伝統芸能と、当然、私たちは現代社会に生きてい

があります。その国づくりの苦しみというのは、我々は明治維新、江戸幕末から明治の初期にかけての近代化の中で、教育から行政、軍事、経済、さまざまな領域で苦しんだ経験に似通っています。

その経験の中で、我々は多少挫折もしたけれども、成功した面もある。そうした成功体験が挫折経験とともに語られるときに、ある意味では後発的な弱みもあるけれども、強さもある国は歴史から教訓を得ることもできるのです。

それは、日本の踏んだ轍を踏まずに、どうすればより効果的、よりポジティブに自らの社会をつくりかえることができるかという点。こういうところで経験や歴史を語っていくときの受けとめ方というのは、感動というものにつながるのだと思います。

日本は明治維新で、戊辰戦争という内戦が行われたわけです。そのことによって国が新しく変わってくる。その生みの苦しみと、しかし犠牲を最小限にとどめたというある種の明るさ。これは我々がテロの問題などを彼らに語っていくときの前向きな材料になる。

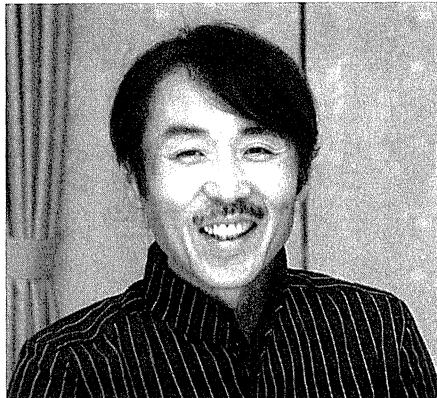
また第二次大戦の苦しみを味わい三〇万の死者を出した国民であるのです。広島、長崎の原爆や東京の二回にわたる大空襲、大阪をはじめとした地方の主要都市なども空襲によって破壊されていく、この中から生まれ変わ

て、普通の近代的な劇場の中で演劇をやるわけですから、それをどう融合させていくかが彼らにとつても課題であって、そのことを日本は経験してきたわけです。それは山内先生がおっしゃられたとおり、何が失敗したか、という負の部分も当然伝えていかなければいけないと思います。

●山内 もう一つ簡単に触れますと、中東ミッド東では柔道の山下泰裕八段、ロサンゼルスオリンピックの金メダリストにも同行いただきました。柔道について語っていただくと同時に、子どもたちに稽古もつけていただきました。これはたいへん大きな感動を人々に与えました。

彼の語りは、柔道とは何か、これはやはり礼でもあるということ、人々に礼儀や作法の優雅な重要性を伝えていく。日本人の心の基本にあるのはこのような優雅な礼でもあるということを経るわけです。

例えば、ロサンゼルスオリンピックの決勝の時にエジプトのラシユワンと対戦した際、ラシユワンは彼の痛い足をこさらに攻めなかったことを例にとりながら、柔道が日本古来の武士道に由来するものであり、一方アラブやイスラムにも人の弱いところを攻めない、人の弱さを決して攻めつけないというアラブ流の武士道、イスラムの道徳性があると山下さんは語るわけです。これらが柔道の精神につながる、



●松田寛山氏
尺八演奏家。鬼太鼓座代表。和太鼓集団「鬼太鼓座」に出演し、日本全国をはじめ世界各国のツアーに参加。JVCより発売のCDにも自作曲を含め多数収録。1999年春、尺八の原点を探る旅として中国国内を自らの足で1,000km走破。2001年より現職。2003年スコットランド出身の女性パーカッショニストのエヴェリン・グレニー氏とのコラボレーションがドキュメンタリー映画「HEART BEAT」に収録され、2004年欧米にて公開。

国際文化交流と日本文化の発信

という話をしながら実技指導をする、それもある種の感動につながるのです。

●里中 日本式の縦書きの文字で、日本語のままでも読みたい。翻訳されていない作品も読みたいがゆえに、日本語を覚えるという若者も増えております。中国の若い子たちも、日本語を、漫画を読みたいがために覚えようとしています。

日本語で会話しておりますと、へあ、この漫画ばかり読んでいるな、ということもわかってきます。例えば『ドラゴンボール』ですと、名古屋弁が出てきたりします。日本語は名古屋弁で覚えてしまい、後で困ったという笑い話もあります。日本が映画を通じてアメリカ人の物の考え方、アメリカ人が考える正義とはこういうものだということから、アメリカという国への理解が深まっていったことと同じ役割を漫画とアニメーションが果たせるとしたらうれしいことです。

日本文化の海外発信の課題

●秋葉 国際文化交流により世界の文化・芸術の発展に我が国が貢献していくためには、我が国の文化を海外に積極的に発信していく必要があります。

そこで、国際文化交流、とりわけ日本文化の発信の課題および推進方策についてご意見



●里中満智子氏

大阪市生まれ。高校在学時に『ピアの肖像』で第1回講談社新人漫画賞を受賞。1974年、『あした輝く』『姫が行く!』の両作品で講談社出版文化賞受賞。代表作に『あすなろ坂』『愛人たち』『アリエスの乙女たち』『ギリシア神話』など多数。現在、『万葉集』の世界を描いた『天上の虹』を描き下ろし単行本で執筆中。大阪芸術大学芸術学部キャラクター造形学科教授、マンガジャパン事務局局長。

をいただきたいと思っています。

●平田 国際交流、文化行政のことを考えるときに、今まではどうだったのかという視点が必要だと思えます。

今までの外交文化行政は、大きくいうと、伝統芸能の紹介か海外に学ぶというスキームしかなかった。今までは伝統のものは伝える、あとは西洋から学ぶ、留学生制度もそれが前提です。

ところが、状況が変わってきて、特にアジアの国は、演劇にしろ、音楽にしろ、漫画にしろ、アニメにしろ、私たちは教えたり教えられたりという対等な立場で交流していかなくてはいけない状態になっているのですが、たぶん行政のシステム自体がまだそこに追いついていないということが最大の課題だと思います。もう一つは何を教えるのか。伝統芸能であればそれを伝えればいいわけですが、太鼓や漫画、私たちがやっている演劇などは、実践することが可能です。

これは実際にあった話ですが、フランスの劇場のロビーに立っていると、おばあさんがどことどことやってきて、『私はあなたの『東京ノート』という作品をやった』と言います。フランス語だったので最初はよく意味がわからなかったのですが、フランスの地方の公民館で、海外の作品を三〜四週間かけてやるということがよくあるのですが、そこで実際に日本人の役

のような学者をあげられるでしょう。

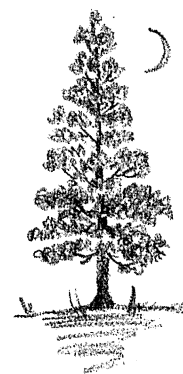
したがって、実は文化交流は、我々がみんな意識してなくても、大きい意味で市民社会を基盤とした文化外交にかかわっている、かわらざるを得ないということの一環なのだと思います。

ただ、問題はいくつかありまして、インターネットやメールは優れたものであると同時に情報伝達のスピードを競うがあまり、正確さにおいてやや欠けるところがある。それから、ものの伝播における重厚さ、ある種の分厚さという点において欠けるところがある。

しかし、国際的な文化交流や日本文化の発信といった場合には、速い情報ではなくて、むしろ私は遅い情報としての文化交流や文化の発信も大事ではないかと思えます。

つまり、文化交流をかりそめに私が定義するとすれば、『時間をかけて相手の国やいろいろな国の人々に対して理解を得るような試み』『日本とは何か、日本文化とは何かということの理解を求めていく能動的な営み』が、文化交流なのだと思います。

だとすれば、お互い理解し合うものとして、基礎には文化力、あるいは教養に培われた情報、すなわち時代が変化し、時間や歴史が移ろっていても、そこにはおのずと揺れがないような、分厚い基礎に固められた、あえていえば遅い情報の必要性を認めなくてはいい



柄を演じてみたと言っています。

そういうことは、今までの日本の文化外交の枠組みの中では、たぶんあまり想定されていなかったと思うのです。実際にやってみようような教え方を、伝え方をすることがこれからは必要ではないでしょうか。

●山内 文化外交や外交といいますと、従来、いわゆる職業外交官、あるいはプロフェッショナルな官僚たちが担うという理解が市民社会で多いかと思いますが、現代の文化外交というのは、異なる文化に属する人々の出会いの機会がたくさん広がっています。

特にインターネットの発展は決定的だったと思いますが、若者だけではなく、私のようなやや年かこの世代や高齢者に至るまで、異文化との出会いや交流の機会が多くなりました。この場を私は「外交空間」と名づけています。

この「外交空間」での大きな影響力や重要性を持つ担い手として、市民、企業経営者、そしてメディア、あるいはNGOやNPO、私

ない。これが文化交流において一番大事な点だと思っております。

つまり、文化交流や対話を重ねることによって、知らず知らずのうちに日本という国が世界において、いわば好かれる国になる、あるいは日本という国が理解される国になるということを目指しているとすれば、相手国についても我々が相手を理解し、相手国との摩擦や衝突を避けていく問題意識を持つことが重要だということですね。ひいては文化交流と対話というのは、日本という国や国民の安全保障や利益にかかわっていくたいへん大事な営みということなのだと思います。そういう文化交流に不断の相互理解があつてこそ、相手国や国際世論に訴えていく説得力を増すのだということです。

●平田 山内先生のお話を受けて少し話をすると、私もずっと対話ということをやってきました。なぜ語学教育に演劇が重要かというところ、対話というのはほかの演説とか、スピーチとか、ディベートとか、あるいは日常会話に比べて、むだな話が多いのです。日本人がよく居酒屋でしゃべるように、相手とコンセンサスをとるために、いろいろ関係のない話をしなければいけないのですが、演劇ではそのような状況を作ることが可能です。

今までの外交というのは、政治とか、経済とか、目的がはっきりしているものであつて、

そこで話されるボキャブラリーも限られていたのですが、対話をするためには余計なことを話さなければいけない。相手がどんな趣味を持っているかわからないわけですから。

●松田 実は、さつき山内先生がおっしゃられた遅い交流というのが、今、ずしと私の心の中に入ってきたのですが、鬼太鼓座ではとにかく遅い、深い交流を頭の中に常に置いて二本の足で走りながら、一般の方とどうやって交流を誕生させていくかといったことに中心の目的を置いて活動しております。

●里中 日本において、日本の漫画やアニメがこれだけ経済性を上げているにもかかわらず、日本人が漫画の歴史を顧みたときに、すでに一昔前のベストセラー作品は読めなくなってしまう。

かねてから漫画の半公立の博物館をほしいと思っていたのですが、web上の博物館でしたら、大きい箱物を建てなくても、web上に漫画博物館として、最初は日本の漫画で全部構築し、日本語、英語、スペイン語、中国語に翻訳して、世界中のどこからでもアクセスできるようにすることもいいと思うのです。

また、二昔前ぐらいに流行った、タイトルだけは聞いたことのあるという作品が読めないということでは、文化国家とは言えないと思います。ルネッサンスの美術が西洋美術史の中であれだけ言われるのは、やはり物が残っている。

い。ひとことで言うと太鼓は音楽じゃない。太鼓は暴力です。それは決してパンチをするわけではないです。何かというと、ステージとお客さまの間に垣根があるのです。それを一瞬にしてぶち壊すことができるのが、日本の太鼓なのです。

だからこそ今後の課題としては、その担い手の人材育成が大事なことです。では西洋化すればいいか。分割リズムのようにやれば、エンターテインメントとして売れていくからいいかという、絶対そのようなことはない。日本の文化として太鼓をどう伝えていくか、日本人のものとして伝えていくための人材は、育成していかないといいけないことです。

西洋楽器、打楽器を学んで、ちよつと脱落してしまつた人は、太鼓に逃げようという人が結構多い。だけどリズムが違う。一瞬にしてテンポが変わるのが許されるのが日本のリズムなのです。

このよき、強さをどう伝えていって、なおかつ一瞬にして垣根を壊す能力を持つ人間を育てていくかというのが大事で、楽器が簡単なだけに、逆にきちんとできる人間力をつくらないと危険だということですね。

●平田 人材育成に関連して、日本の中での国際化の問題があると思います。親のどちらかが外国籍である子どもがたくさん生まれています。その中で、日本の文化をどう考えてい

おり、検証できるからなのです。空襲も受けずに、フィレンツェが残ったということが大きいわけですね。

あと一〇〇年、二〇〇年たつたときに、かつて日本は漫画とアニメの最先端の国だといわれたのに、その作品はどんなものは、海外のマニアの方が持っているボロボロの本しか現物が無いということになりたくありません。

●山内 インターネットは、漫画の普及あるいは保存、展覧に本場に役に立ちますね。瞬時性、即時性という点で、非常にそれはいいと思います。

私が子どものころに感動したような『赤胴鈴之助』や『朱房の小太郎』のようなさわやかな作品は、もう見られなくなっているのでしょうか。子どもだった時分の漫画を見たいという大人も多いと思うのです。内外を問わずに、懐かしの漫画にすぐアクセスできるというのはすばらしいことで、私は大賛成です。

●平田 今、劇作家協会も、昔の出版では経済的に成り立たない作品を、今年からアーカイブにしています。

また、戯曲の場合は、ダウンロードして上演したいという要望も出てくるので、オンデマンド出版などで一冊三〇〇〇円ぐらいなのですが、在庫を抱えないでいいので、今年から始めることにしました。

●里中 笑い話で本当かどうか不明ですが、くのか。日本の文化を国際社会の中でどう位置づけていくのかということ、日本の国内でも考えていくべきであり、教育のシステムも変えていくべきだと思います。

歴史認識のことでも、最初に山内先生もおっしゃられたように、同じ教科書を使うことはなかなか難しいです。しかし、子どもたちが国際社会の中で生きていかなければならないことがわかつていくわけですから、社会科の時間とは別に、例えば国際交流という時間を、少なくとも中学ぐらいで週に一時間ぐらい設けることは十分に可能だと思います。その中で、韓国の歴史教育、中国の歴史教育と、文化とをセットにして教えていってもいいのではないですか。そのくらい大きな転換期に来ているのではないかと思います。

ですから、文化発信も大事ですが、日本の国際化がないと、発信だけということはありませんか。

また、地域間交流も重要な課題です。国家というレベルではなく、例えば韓国は完全に対等に共同作品をつくれる経済力があるので、韓国の地方自治体と日本の地方自治体が組んで、演劇の共同制作を行うということがこれからたくさん出てくると思います。そのようなことをバックアップするような施策が必要なのではないでしょうか。

●松田 鬼太鼓座では、富士山の懐から日本



●秋葉正嗣
文化庁長官官房国際課長

サウジアラビアの砂漠の真ん中で、インターネットで検索していたら、「漫画」という言葉が出てきた。「漫画」という言葉は、アメリカのコミックではなく、日本型の漫画ということで、世界の言葉になっています。それを読んでみたら、言葉はわからないけれどもおもしろかったのも、もつと読みたいと言っている、という話を聞いたことがあります。

世界の隅々まで、インターネットというのはいろいろな意見も、くだらない戯言も流れてしまっていますが、一人ひとりがどんな立場であるかというの流す。そういう意味ではすばらしいものです。そして、誰か一人でもアクセスしたい人がいれば、開かれている情報を読むことができる。それにより価値観は変わっていくと思うのです。

●松田 太鼓の場合、本当に有利で伝えやすさを象徴する文化発信基地をつくりたいと考え、太鼓を中心に、まずは日本の音楽、それからアジア原産の竹を素材とした竹のグループの音楽などの共同制作を考えています。そこに今年の一月に韓国を呼びたいと思っています。それから中国、インドネシアに声をかけて、文化発信基地をつくらうと思っています。そこから世界に発信していくことができるように考えています。

●平田 文化行政のいちばんの役割は世界の文化に貢献することだと思います。日本の税金で行うので、日本をアピールしたいという気持ちはわかりますが、最終的には文化行政というのは一〇〇年、二〇〇年の仕事ですから、あまり日本、日本と言わずに、日本の文化がどうやって世界の文化の中に位置づけられていくのかという大きな哲学がないと、自国中心主義では文化行政は成り立たないのではないかと思います。

それから、やはり日本の外交の中で、日韓、日中、それからアジアは非常に重要なことで、そこでどうしてもやらなければいけないことは何か、助成方法を含め、メリハリをつけていくことが大事なのではないかと思っています。

●秋葉 本日は、長時間にわたりまして、国際文化交流と日本文化の発信について貴重なご意見、ご提言をたまわりましてありがとうございます。

■ 成羽町美術館

住所：〒716-0111
岡山県高梁市成羽町下原 1068-3
電話番号：0866-42-4455
URL：http://www.nariwa.ne.jp/
museum/

アクセス：
JR 岡山駅から伯備線で約 50 分〔備
中高梁駅〕下車、備北バスで約 15 分
「成羽」停留所下車すぐ
岡山自動車道〔賀陽 IC〕または〔総社
IC〕、中国自動車道〔北房 IC〕または
「新見 IC」から車で約 30 ～ 40 分
開館時間：9:30 ～ 17:00
（入館は 16:30 まで）
休館日：毎週月曜日
（祝日または振替休日の場合
はその翌日）

季節の花シリーズ「ヨメナ」

登校●児島虎次郎（こじま・とらじろう 1881～1929）作
明治 39（1906）年■油彩・キャンバス■133.0cm×111.5cm■成羽町美術館蔵

児島虎次郎は岡山県成羽町出身。東京美術学校（現：東京芸術大学）を卒業後、ヨーロッパ留学で色彩画家として開花した児島は、その萌芽を初期の代表作「登校」に見ることができる。本作品は、東京美術学校研究科の頃、帰省中に倉敷で描かれたと言われている。朝日濡れくる木立の中、学舎を目指す少女たちが愛らしい。手前の物憂げな面持ちの少女の手には道草して摘んだのか、薄紅色のヨメナが、そして日傘の少女が見据える先には赤とんぼが描かれており、秋の訪れを感じさせる。舶来とおぼしき大きな朱色の日傘やコサージュ付の帽子は当時としては貴重品であり、彼女等の暮らしを物語るとともに、西欧の気配が地方にも伝播してきた様子がうかがえる。人物の前面は逆光のため影となっているがそのことがかえって背後から降りそそぐ陽の光を強く感じさせ、画面に奥行きを与えている。児島は当時から光を効果的に配置することで日常的な場面を情感豊かな光景へと演出していく手法を得意としていた。そして後のベルギー留学では、光の輝きをキャンバス上に再現することを課題として、鮮やかな色彩による点描技法なども試みたのであった。

ところで、「登校」が描かれた頃は、日清、日露戦争をへた明治 39 年。疲弊きった日本において、子どもたちは必ずしも少女らのように衣食足りて、教育を受ける環境が許されていたとはいえない時代である。画家にとっては子どもたちが学び、行く道を自身が選び取るという豊かな社会への祈りが込められた制作だったのかもしれない。（学芸員 渡辺浩美）

編集後記

▽天高くさわやかに晴れあがった空。秋の訪れを感じます。
さて、今月は国際文化交流に関する特集です。世界の国々、人々と文化交流を通じて、お互いの理解や信頼を高め、友好関係を深めます。また日本文化の発信や文化の分野で国際協力を積極的に進めることも重要です。我が国が文化交流によって、世界の多様な文化の発展と、世界の平和と繁栄に貢献することが今後の課題ですね。
▽今月の表紙テーマは、ヨメナ（嫁菜）。少女の手の中にあるその花は、万葉の昔から摘み草とし

て親しまれ、川べりや野道に生える野菊の一種です。ヨメナはおもに関西から西に生育しています。関東以北ではヨメナに似たカントウヨメナが生育しているそうです。秋の気配は、赤蜻蛉（せみ）にも。実はこの赤蜻蛉という名前の蜻蛉はいないのだとか。胴が赤い蜻蛉の総称で、夏茜、秋茜、深山茜、姫茜などという。古来、日本では蜻蛉のことを、「秋津」と呼び、親しまれてきた。「津」は「しづみ」という意味で、秋の代表的な虫ということなのです。ふるさとを想う秋（郷）

次号(10月号)予告

特集

特別支援教育の推進

- 巻頭言 ————— 高倉 翔
- エッセイ ————— 上野一彦／藤原 治／
斎藤佐和／小田 豊
- 座談会 ————— 大南英明／川邊重彦／
黒川君江／山岡 修／瀧本 寛



あたらしい学舎 part Ⅲ
————— 京都市立北総合養護学校

MEXT.61 月刊

文部科学時報 9月号

第1567号

- 著作権所有 ———— 文部科学省◎
- 発行所 ———— 株式会社 ぎょうせい
 - 本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
 - 本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16
 - 電話 03-5349-6666（営業部）
 - URL http://www.gyosei.co.jp
- 印刷所 ———— ぎょうせいデジタル株式会社

平成18年9月10日印刷
平成18年9月10日発行

定価610円(本体581円)(〒84円)
年間購読料7,320円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いいたします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 2006 ISSN 1346-325X ●この刊行物は再生紙を使用しています。